令和 7 年度日臨技北日本支部医学検査学会（第 13 回）を終えて

実行委員長　小林　清子

2025 年 11 月 15 日（土）・16 日（日）、朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンターにおいて開催いたしました「令和 7 年度日臨技北日本支部医学検査学会（第 13 回）」は、おかげさまで盛会のうちに無事終了いたしました。ご参加くださいました多くの会員の皆様、講師、座長をお務めいただきました先生方、ならびにご支援ご協力を賜りました関係各位に、心より御礼申し上げます。

前回大会の仙台での学会視察を終え、本格的に学会準備を開始してから約 1 年、実行委員会を中心に準備をしてまいりました。プログラムについては、学会テーマ「基（もとい）～強く、そしてしなやかに～」に沿い、学術においても医療人としても基本を大切に、そして時代の変化にも強くしなやかに対応する力を持ちたいという考えのもと、特別企画、学術部門企画を立案しました。早々にプログラムを公表したことで、我々の想いを北日本支部全体に届けました。この学会に行ってみたい、参加したいと感じていただけるようなプログラム作りは実行委員会の重要な責務です。結果的に、学会には 1,082 名もの方々にご参加いただきました。特別企画 20 企画、共催セミナー12 社、そして一般演題には 155 演題もの登録を頂きました。プログラムの内容は、学会の集客に大きく影響します。どの内容も、学会テーマに沿った基本の大切さ、医療や福祉の場で柔軟に対応できる知識や技量を養う、臨床検査技師としてあるべき姿を考える内容であり、共感を得た結果だと思います。特徴的だったことは、参加者がともに考える参加型の企画が多かったことです。生理検査や一般検査の症例カンファレンス、微生物検査シンポジウム、学生フォーラムでは、参加者が選択肢やアンケートに自ら回答し、主体的に参加することではじめてその企画が完成するというスタイルです。共に企画を作り上げていくという感覚になったと思います。

さて、お気づきの方も多いと思いますが、今回の学会では新しい試みもありました。企業展示会場で行うスタンプラリーは、はじめてデジタルスタンプラリーを取り入れました。ほとんどの支部学会では、未だシールと台紙ですが、本学会はデジタルに挑戦しました。かなり早い時期から「ぜひデジタルスタンプラリーをやりたい」とわがままを申しました。随分困らせたと思いますが、当会のコアメンバーはそれを実現してくれました。全国ではほとんどありません。結果的に参加者や企業様に大変喜んでいただけました。さすがとしか言いようがありません。また、LINE や Instagram の活用も集客や情報提供に必要です。当日も LINE による発信で人の流れをコントロールできました。タイムリーな情報の発信は、参加者を飽きさせず、各講演会場への誘導やサービスの提供に役立ちました。映像では、情報交換会で第 1 日目の学会ダイ

ジェストを流しました。先ほどまでの学会の様子が映像で出ると思わなかったと好評でした。閉会式前には、映画のエンドロールのように学会を締めくくり、映像の最後は、次回開催秋田県へ「紡ぐ」というバトンタッチの意味を込めました。秋田県視察団の皆様も大変感動していたようです。やはり映像の力は大きく、実行委員のセンスが輝いた一面だと思います。

とかく大きな数字や賑わいに成功の目が向けられがちですが、それを達成するまでには、見えないところでひとりひとりが頑張ってくれたことを知っています。とてもありがたく、うれしく思います。仕事の合間をぬって、また休日を削り学会のために尽力していただいた皆さんの努力で成り立っていたことにあらためて感謝します。
当然、学術企画の充実が重要ではありますが、それだけではなかなか集客はできません。プラスαの部分が学会の楽しさや面白さに彩りを添えます。そういう意味では、新臨技として新しいことにも挑戦出来て、全体的にはバランスが取れていたように感じます。快適に学会に参加していただけるように気を配っていたことや次回開催県への当会スタッフの心配りもよく表れていたように感じました。

最後になりますが、本学会を終えて、学術の研鑽とともに、強く、しなやかに時代の変化に対応していくことの方向性を少しでも感じていただけたら、本学会開催の意味があると考えます。総勢55名の実行委員は一丸となり、おもてなしの心をもって企画、運営を行いました。当然、反省点や改善点もありますが、それは今後の技師会活動に生かしましょう。今まで以上に新臨技のチームワークを深めながら活動に生かせることでしょう。

学会運営に携わっていただいた全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。

令和7年度日臨技北日本支部医学検査学会（第13回）

実行委員長　小林清子